

中学部の実践

——生きて働く力を育てる中学部の実践——

1. 教育目標をどう考えたらよいか

養護学校の子どもたちには、いずれは卒業という現実がぶつかることになる。

従来から「働く職場が決まって、社会に巣立っていく」子どもの姿を見て、親は卒業を実感として感じとるであろうし、教師は精薄教育のひとつの段階が終了したと感じてきたはずである。こうして、卒業は直ちに就職につながり、従って社会自立の道がここから始まると考えられてきた。

しかし、障害が重いために就職の見通しがたはず、現実に不可能と思われる子どもたちを目前にすると、社会自立ということのばの意味をあらためて問い直す必要が生じてきた。

かつて精薄教育の対象を比較的障害の軽い者に限っていた頃は当然であったことも、今、重度・多様化する子どもを前にして、私たちの考え方を再検討しなければならなくなった。

ただ視点を障害児自身にあてて、障害の程度から自立の可能性を論じるのではなく、「社会自立」を受け入れる側、つまり社会に視点をあてて考えることも必要である。国連の国際障害者年行動計画は、「ハンディキャップ」を器質障害や機能障害と区別すること、それに「障害を個人と環境の関係としてとらえること」を呼びかけているが、これは、障害者の不利益が障害に直接起因するものでなく、社会が彼らに不利益を課してきた点を認識し、過去の愚弊を改めることで、障害者の社会参加を助するよう求めているものである。

——上記の能く入りしはたが。

本校では、こうした考え方に立って、特に中学部では社会参加の上で生きて働く力を育てる実践に取り組むこととし、「豊かな心をもち、たくましく行動する子」の研究主題を掲げて、目標に

せまろうとしているのである。

2. 中学部の学習内容(指導内容)をどう設定したらよいか。

従来から中学部の教育は、「小学部で身につけに日常生活の基本的なことからや社会参加の能力を更に高め、参加の範囲や経験内容を拡大し、徐々に地域社会のしくみや働きについての基礎的な理解を深めさせ、進んでこれらに参加させながら、将来の職業人あるいは家庭の一員として必要な技能や態度を養い、高等部における職業教育の基盤づくりを図る」ことであった。

現段階では従来の立場に立って学習を設定しているが、将来の重度・多様化傾向を予測して、それに対処できるよういくつかの点について新しい試みを取り入れてきた。

勿論、昨年度までに編成を終わった教育過程(段階別教育内容表)に準拠し、社会化の分野を中心に学習内容を設定し、月別展開案(月別指導計画)により学習が展開されている。

その中で特に努力したり、改善した点は次の通りである。

① 中学部の教育方針

「友だちといっしょに楽しんで生活する子」

友だちとのかかわりを大切にし、意欲的に生活と取り組む中で、社会生活に必要な初歩的なことから身につけさせる。

② 中学部の指導の重点

① 日常生活(社会生活)に必要な基礎的なことから素直に表現する

② 仕事や運動にかいっぱい取り組む

③ 中学部経営の基本方針

① 生活単元の取り組み強化

道徳教育・同和教育にも視点をあて、教科・領域の合科統合をめぐりて模索する。

② 作業学習の充実

技能の習得にこだわらず、働く意欲を育てることをめぐりて、全生徒に本校の全作業種目を経験させる。

⑤ 学力の伸長と充実

教科的扱いもおろそかにせず、生活の中に生きて働く力としての定着をめざして取り組む

⑥ 体カづくり

体育の時間を工夫するだけでなく、学校生活全体の中で実践を考えていく。

⑦ 余暇の活用

子どもの余暇の充実には、もっとも自主的な活動である。教師の余暇でなく、子どもの余暇の充実に心がける。

⑧ 教科担任制から学級担任制へ移す

以上の方針を確認した上で、昨年度の月別指導計画を検討し、本年度の実践と取り組んできた。しかも、国語では、日記・作文・手紙・劇化を、数学では、金銭と時間・時刻を中心に学習内容を設定するなど、各教科にわたって取り組みの視点を明確にした。

3. 研究主題に対する中学部の理解

「豊かな心をもち、たくましく行動する子」とはどんな子どもかについて、中学部11名の生徒の実態から考察することを、研究の取り組みの出発にした。

(1) 研究主題と生徒の実態

生徒の実態(状態)を、「豊かな心」「まずしい心」「たくましい行動」「たくましくない行動」の4項目に分けて、中学部の担任(名)がそれぞれ把握している事柄を全部だしてまとめてみた。その結果は、

① 「豊かな心」は、・人に親切にする。・「すみません」がすぐことばに出る。・人の失敗を許す。・うそをつかない。など、99項目にわたってその状態をみた。

② 「まずしい心」は、・好奇心がない。・約束を守らない。・よくすねる。・その人といると楽しくない。・人のよくないことばかり目につく。など、68項目について、その状態をみた。

⑤ 「たくましい行動」は、・買い物はひとりでする。・手伝いをする。・意欲をもって行動する。・最後までやりぬく。・自信をもって行動する。など、89項目について、その状態をみた。

⑥ 「たくましくない行動」は、・すぐ仕事を投げ出す。・指示に従わない。・無気力な行動。・返事をしない。・自分の感情に左右される。・すぐ泣き出す。・汚れることを嫌う。など、63項目について、その状態をみた。

この4項目のまとめから考察できたことは、

⑦ 4項目の状態をみると、私たちの把握は、4項目が相互に関連しあい、「豊かな心」と「ますしい心」・「たくましい行動」と「たくましくない行動」を裏腹の関係にあるものとする。

⑧ どの項目についても道徳性あるいは正邪善悪が実態把握の基準のようなものになっている。

⑨ 4項目とも、同じ内容のものをまとめてみると、例えば「豊かな心」の内、「愛情・やさしさがある」に関連するものを集めてみると

小動物に関心をもつ。

↓
小動物を可愛がる。

↓
生き物を大切にする。

↓
下級生のめんどうをよくみる。

↓
人に親切にする。

↓
人を助けようとする。

↓
やさしい心をもっている。

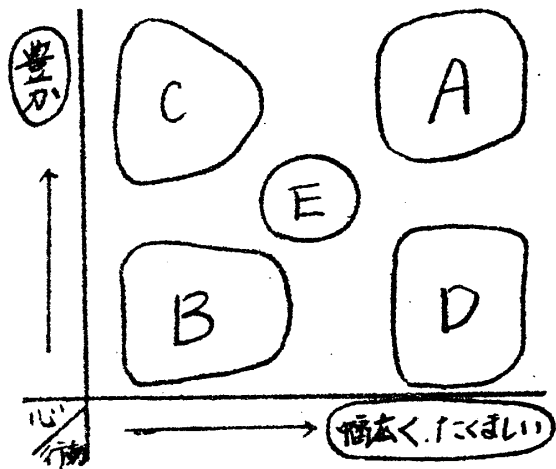
↓
思いやりがある。

↓
人の親切がわかる。

↓
愛・いつくしみがある。

のような深まりをみることができる。この心の深まり(豊かさ)と行動の幅広さ・たくましさを試みに次のような図

式で表わし、5つのタイプを挙げ、その上で指導法が模索できるのではないかと考えてみた。



① Aタイプ 豊かな心をもって、すべての面できましい行動が見られるタイプ。

② Bタイプ 単純で心の働きが狭く、すべての行動がひ弱なタイプ。

③ Cタイプ 豊かな心の持ち主ではあるが、それが限られた面で見られず、限られた面できましい行動のみ見られないタイプ。

④ Dタイプ 心の働きは単純だが、中広い場面でできましい行動が出るタイプ。

⑤ Eタイプ 心・行動とも平均的なタイプ。

このような考え方に問題があるとするは、どういう点かを検討してみたい。

② 生徒の実態を4項目にまとめてみると、次のA子について例示するように矛盾する両面も見られるが、実像も浮かび上がって来る。

豊かな心	たくましい行動	ますしい心	にくましくない行動
<ul style="list-style-type: none"> やさしい心の持ち主 他人のめんどろをおくみる 反省する あいさつができる 思いやりがある かわいがりと思ふ心 自分の気持ちをおく人を優先する 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の意志で行動 自分のことは自分でする 手伝いをする かいほい取り組む 指示に従う まじめにする あいさつが堂々としてできる ひとりですることが多い 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の非を素直に認めない 人をいじめめる 気に入らんと自分が一番不幸と思ふこと かげひなたがある 他人をさげすむ 感情表現が乏しい 協調性がない いぼろうとする 	<ul style="list-style-type: none"> 自分勝手にする 気分ではたりしほかたり 集団で遊ぶことを好まぬ すぐにあきらむ 自主性に乏しい 自信がもてない 他人にさやわれるまづついていく

これはA子に対する、中学部6人の教師による記述であるが、改めてその実像を認識させられた。

私たちはここでまさにひとつの仮説的な考えに立って、子どもたちの実態を把握していくことにした。

即ち、子どもたちは例外なく、豊かな心もたくましい行動も持っている。あるいはそのような可能性をもっており、仮にその心・行動は低次のものであり、ほんの僅かなものであってもそれなりに「豊かな心」「たくましい行動」であり、その子の宝である。その子のよさ(持ち味)である。

従って「ひとりひとりの子どものよさ(持ち味)を大切にし、刺激することでさらに子どものよさを引き出すことが」でき、生活の中で生きて働く力になっていくのではないか、というのである。言い換えると、子どもの持っている問題点(この場合まずしい心・行動)は、その子の個性を形成しているものであって、治療・改善の対象となるものは、それが解決困難かどうかは別に、極めて限られたものではないだろうか。私たちが自身を考えてみても、心・行動に問題点のない人などひとりもないし、時に一般常識から考えて承認しがたい奇人変人が社会的に認められることだってあることは周知の通りである。

子どもの問題点をみつめる教師の目は、常に子どものよさ(持ち味)の上で立っていなければならないと思うのである。

① 生徒の実態の中から比較的共通するものをまとめてみた。次に示すものが、中学部生徒によく見られる特徴であり、指導上配慮されなければならない点ということになる。

- ① やさしく思いやりがある。
- ② 喜怒哀楽の感情を比較的よく表わす。
- ③ 人に言われたり指示されると行動するが、自分からは何もしない。
- ④ 協力しようとしなない。
- ⑤ あきやすく、根気が続かない。

以上、生徒の実態把握について、研究主題と関連をもって検討を重ねてきた。そして、次のような点について、ひとりひとりの子どもを共通理解し、授業の中で、「生きて働く力を育てる実践」と取り組むことにした。

名	CA	MA	IQ	問題となる心・行動
A (1)	14:2	8:5	62	素直さに欠け、行動にかげひなたがある。暗い表情で人の気を引こうとしたり、ツンツンして口をきかぬかったり、対人関係がわるい。
B (1)	13:4	5:9	46	集中力に欠け注意散漫で根気がない。自己中心性強く、その態度や行動が友だちとの争いの原因とほることが多い。よく泣く。言語不明瞭。
C (1)	13:0	/	SS 22	弱い立場の者に対して、差別した言動が目立つ。仕事にあきやすく、根気が続かない。自分に都合の悪いことはかくし通そうとする。
D (1)	13:4	/	36 XF	協調性に欠け、単独行動が多い。固執性が強く新しい学習に対する抵抗が強く、無理をするとパニックが起きやすい。自閉的傾向がみえる。
E (1)	13:8	5:8	44	自主性に乏しく依頼心が強い。知らない集団の中では恥しくて話すこともできなくなる。ダウン症。
F (3)	14:6	7:7	55	自制心が乏しい。虚言癖あり。物欲も強く入手に手段を選ばない。仕事の態度にかげひなたがみられ、指示された仕事の外は根気が続かない。
G (2)	15:4	5:2	35	言語による意志の交換が困難。言語不明瞭。自分の言動に自信がなく、模倣・オーム返しが多い。指示された仕事はがんばるが自主的行動はみられない。
H (2)	14:1	7:4	55	自己中心性が強烈で、周囲の状況を無視した言動が多い。感情が高ぶると人をたたいたり、泣いたりする。自分のほしいものは、自他の区別なく手に入れようとする。

I (3)	15:8	12:2	88	固執性が強く、注意されるとカッとなり攻撃的 態度になる。善悪の判断がへても、自分の非を 認めたり、謝まることをしない。
J (3)	15:8	7:1	47	気分によって行動が左右されやすい。指示がす ぎるとすねてしまう。 動作が大へんおそい。
K (3)	15:8	8:3	55	動作緩慢で競争心が乏しい。教員まで、すぐ周 囲の影響を受けやすく、人の迷惑を考えない言動 が多くなる。

(2) 研究主題と学習過程

「豊かな心をもち、たくましく行動する」子どもたちが、生活
の中で生きて働く力を発揮するには、効果的な学習過程・指導法
が確立されていなければならぬ。

この研究主題との取り組みに当って、中学部の基本的なかまを
を共通理解する中で、やる気・意欲の問題と関係が深く、現われ
る行動は、社会的に承認され社会化の方向で深化されなければなら
ぬものとして結論づけた。

このことは、研究紀要第3集で、「表現化に視点をあてた」本
校の取り組みを詳しく述べているが、全く同じ立場だと考える。
即ち、日常生活の中で、「生きて働く力」となって定着に向うため
には、授業に意欲的に取り組み、それが持続され、自分のものにな
っていくことが大切である。授業の展開もその点が十分配慮さ
れていなければならぬ。」のである。

従って、基本とほる学習過程は、下表の通りで、表現化に視点
をあてた前年度までの立場をそのまま踏襲した。

導入の段階	展開の段階	発展の段階
① 興味・意欲・関心の発 生。	① みんなの中で、生 き生きと取り組む。	① よろこびをもつ。
↓	↓	↓
② 興味をもつ。 } 意欲をもつ。 関心をもつ。 }	② 意識して取り組む ↓ 興味・関心・意欲の持続	② 生活の中でわか る。

③ 研究主題と指導法の工夫

「豊かな心を持ち、たくましく行動する子」をめざす授業の手だて・指導法について、基本となる学習過程に視点をあて、今年度の実践を検討してみた。授業の中で取り上げたものを列挙すると次の通りである。未整理ではあるが、現段階のものとして報告しておく。

- ① やさしい絵物語を提示した。
- ② 授業の中で名曲を聞く機会を多くもった。
- ③ 興味関心のあるものを選んで、意欲が少しでも続くようにした。
- ④ みんなが一緒に取り組めるものを選んで、楽しく盛り上げて参加できるようにした。
- ⑤ 一時間の授業が中途半端に終わらないよう、何かをやり遂げる内容を選定した。(満足感・充足感をもつ)
- ⑥ あいさつ・会話の機会を必ずつくった。
- ⑦ 人形劇・絵本・紙芝居・演劇・映画など可能な限り目で講えるものを取り入れた。
- ⑧ 目標をしぼって、ひとつのことに集中してやり遂げるようにした。
- ⑨ スモールステップ化に心がけ、反復練習した。
- ⑩ 何をしているか、目的をはっきり意識させた。
- ⑪ 作業(動き)を学習の中心にすえ、子どもたちが最後まで取り組める内容を工夫した。
- ⑫ 子どもたちによがせることのできる内容を取り入れるようにした。
- ⑬ 授業を学校の生活の中で、くり返し取り組めるようにした。
- ⑭ 作業学習に力を入れた。
- ⑮ 新しい知識の学習より、既習の知識を応用するようになった。
- ⑯ 校外学習(現場を通じた学習)を多く取り入れた。
- ⑰ 自分自身でやってみる場面を多くした。

中学時代の授業で効果的は指導法について、さらに検討を深め

たいと考えている。

(4) 研究主題と養護・訓練からのアプローチ

精薄児に対する養・訓の指導をどうするかは、本校開設以来の課題である。精薄児に対する養・訓は、対象児が重度化するに伴って、特設された時間より、全教科・領域の中で配慮すべきこととして、特別な訓練や治療を軽視する傾向があった。

ひとつには、養・訓担当者が専任されていても、必ずしも専門家でないという点も原因しているが、精薄児の場合、養・訓による訓練や治療もあるひとつの領域に焦点を付けて取り組むことがむづかしく、子どもの全発達の問題となり、やり組みずばわからぬということもあつたと思う。

本校では、4月以來、養・訓の問題と正面から取り組んできた。中学部では、生徒ひとりひとりの発達と障害をつかむため当面養・訓グループが中心となってフロスティック「視知覚発達検査、パーデュ-知覚運動検査など諸検査を実施した。次に示すのは、このうちフロスティック「視知覚発達検査の結果であるが、今後、フロスティック「視知覚能力促進法について研修し、特設した養・訓の時間はもとより、他の学習にもその考えを積極的に取り入れることしている。

フロスティック 視知覚発達検査

生徒名	下位検査 CA	I	II	III	IV	V
		視覚と運動の 統合	図形と素地	形の恒常性	空間における位 置	空間関係
A.T	14:2	9:04	3:06	3:06	6:06	7:04
K.T	13:8	4:03	4:00	4:00	5:08	5:09
Y.W	13:4	5:10	3:09	3:09	3:03	3:08
A.K	13:0	5:06	4:11	4:11	4:00	4:10
Y.I	13:4	4:00	5:03	5:03	2:08	5:09
Y.T	14:6	9:04	8:06	6:07	8:00	5:09
T.Y	15:4	4:09	3:06	3:03	2:08	3:08
Y.A	14:1	6:06	6:10	4:06	6:06	5:09
H.T	15:8	9:04	8:06	6:01	8:00	8:00
S.T	15:8	9:04	8:02	8:05	6:06	7:04
K.M	15:8	9:04	5:11	5:03	8:00	6:06

この表でもわかるように、全般的にみて、「形の恒常性」「空間における位置」のどちらかに、大きく落ち込みがあることがわかった。

そこで、この落ち込みに注目し、ここを中心にプログラムを組んで訓練することで、子どもの認知能力を刺激し、学習効果をあげることができるといふ仮説のもとに取り組むことにした。

養訓での計画は、フロステットの視知覚学習ブックを基本に、これに身体運動・ゲーム遊び・指遊び・模倣遊びなどを加えて構成することになっている。

当然、落ち込み領域のみの訓練が、子どもの視知覚能力を伸ばすとは考えていないが、まず取り組みをここからはじめ、全領域での訓練、生活場面・学習場面での応用を考えている。

養・訓にフロステットを取り入れた実践は、3学期に入ってから始めたばかりである。

以上、本校中学部の研究主題との取り組みの基本的立場・態度について述べた。

しかし、教育目標を設定し、「生きつ働く力」を育てる学習過程・指導法を確立したとしても、実際に授業をするのは教師である。教師自らが、日々の生活の中で、「豊かほ心」を育て「たくましい行動」を心がけ、たゆまぬ努力をすることこそ大切なことである。換言すると、教師のやる気が子どもを育てると言うことである。関計夫教授は、子どものやる気を育てるには、・健康づくり。・精神的雰囲気づくり。・よい習慣づくり。の3点をあげている。これは、そのまま、本校の研究主題と取り組む教師の努力点でもある。

また、保護者とのごかわりを無視してはならない。保護者・教師・子どもの三位一体の取り組みが子どもを育てるのである。

以下、緒についたばかりの中学部の実践の一端を述べてみる。

手芸的要素を取り入れて、楽しみながら基礎縫いの技能の高まりをめざす被服科の指導

1. 被服科の基本的立場

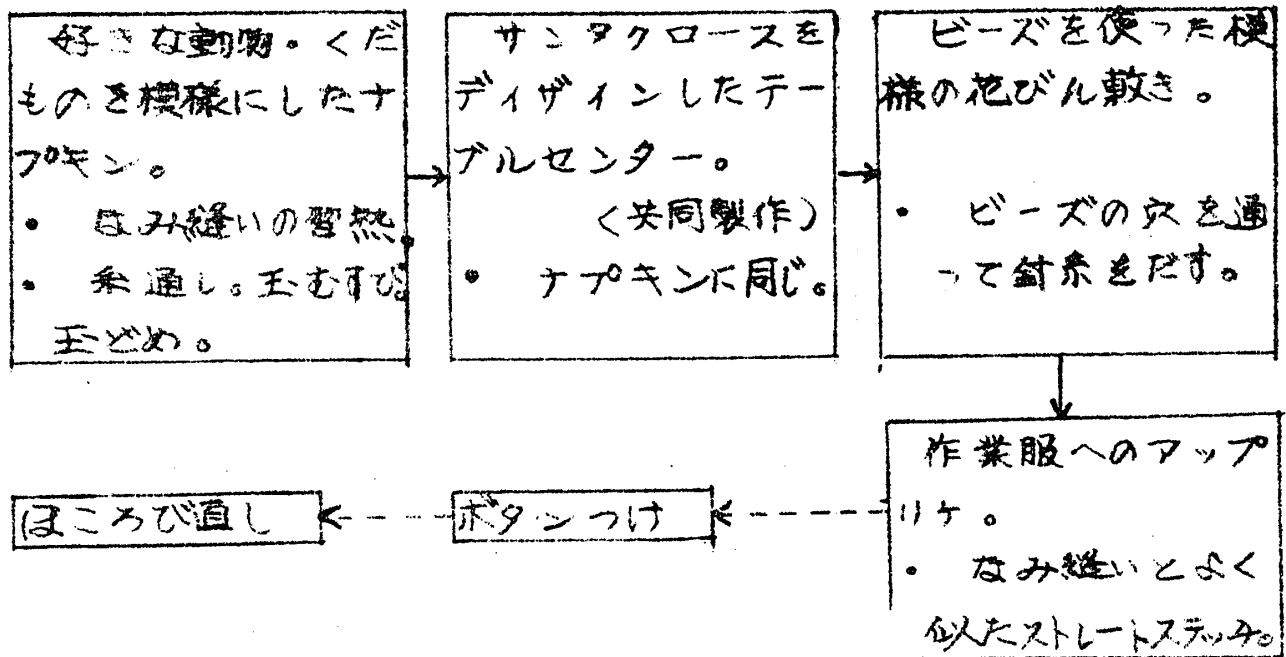
被服科は技能的教科といわれている。もっとも基礎的な縫いができるためには、針と糸との関係を知って、針穴への糸通し・玉むすび・玉どめなど、かなり習得が困難な技能が要求される。事実、年度当初、針穴に糸が通って、玉むすびができた生徒は、11名中僅か1名であった。

中学部における被服科の計画は、「せめて自分で簡単なボタンつけやひきはほころびを処理する。」ことをめざした内容で編成することを共通理解した。

そのための基礎訓練が、単なるトレーニングの繰り返しで、子どもたちの関心を失い、意欲を欠く結果にはなっては、この目的を達成することはできないと思う。

そこで、最初から子どもたちが興味関心を示すと思われる模様の縫いとりを計画し、糸通し・玉むすびは、縫いの反復練習の過程であせられず取り組むことにした。

2. 手芸的要素を取り入れた題材と技能的なねらい



3. 実践例 — サンタクロース模様のテーブルセンター —

本題材は、中学部のクリスマス会をめぐり、会場を飾る目的をもって共同製作するものである。

右図のように、点線が示す15枚の布を使用し、行事と結びつけることで、



(a) はみ縫い・糸通し・玉むすび・玉どめに意欲的に取りくませる。

(b) クリスマスに向けて、共同でつくり、使うことで、喜びや満足感を充ち味わうことができる。

と、考えたわけである。前のナポキンの製作まで、技能的なものは最初の1名を除いて期待できはかったが、興味・関心は少しづつ高まり、意欲的に取り組みがみられた。

(1) 学習の流れと意図・留意点

学習の流れ	意図・留意点
① 共同製作を意識する。	① 15枚の西洋紙を並べて描いた絵を、ハズル式に並べ、絵の内容を意識化させ、行事との関連で興味・関心を高める。
② 製作箇所を決める。	② 自分の取り組みたい場面を自分で決める。2人以上が同じ箇所は相談する。
③ はみ縫いをする。 糸通し 玉むすび 玉どめ	③ 子どもの作業意欲を欠かないよう、最初だけは糸の通った針を準備し、はみ縫いに入る。 模様の線に濃淡をつけ、作業がしやすいように援助する。 糸通し・玉むすび・玉どめは、個々の能力に応じて、無理をしないようにする。
④ 作品の鑑賞	④ 作品を並べながら次々に完成する様子を見る。

(2) 子どもの反心・考察

- (ア) 学部行事と結びつけた題材を選んだこと、紙パズルによる導入は、興味・関心の発生に役立ち、「やろう。」という意欲をかきたてた。
- (イ) 前時製作のナプキンの提示だけで作業内容を知り、なみ縫いに取り組むことができた。
- (ウ) 次第に絵が浮きぼりになっていく過程がよくわかり、興味・関心・意欲の持続に効果的な材料だった。
- (エ) 時間中に自分の作品を完成させた生徒は1名であったが、共同製作ということもあって放課後も自主的取り組み完成への努力がほとんどの生徒に見られた。
- (オ) 糸通し・玉むすび・玉どめは、個人差が大きくなった。抵抗も大きいので、週度に集中的に取り組ませて意欲を欠くことのないよう配慮したことは、意欲を持続させる上で大切なことだと思った。
- (カ) 黒地に白糸ではっきりわかることが、効果的だったように思う。
- (キ) 全体的に生徒は満足感を味わったと思う。クリスマス会の雰囲気づくりでも効果的で、人気を博した。
- (ク) 現段階での生徒の技能習得状況は次の通りである。

項目	生徒名	A・T	K・T	Y・W	A・K	N・I	Y・T	T・Y	Y・A	H・T	S・T	K・M
なみ縫い		○	○	○	○	○	○	○	○	◎	◎	○
糸通し		○	×	◎	◎	○	◎	×	○	◎	◎	◎
玉むすび		○	×	×	○	×	○	×	×	○	◎	○
玉どめ		○	×	×	○	×	○	×	×	○	○	○

(◎よくできる ○多少のびる ×できない)

(3) 家庭生活での反応

技能の高まりとともに、家庭の中での反応もみえはじめた。ここには、生活ノートによる親からの連絡を一例だけ紹介する。

やぶけていたお父さんのステテコを見つけて縫ってくれました。おしりのあたり100%はあまりました。つら。クッションやつんぽど少しはこぼれていると縫っています。

(岸本陽子)

クリスマス会を成功させた合同音楽の指導

1. 中学部における音楽科の基本的立場

音楽科の学習は、音楽に触れること自体が生活に潤いを持たせ情緒の安定を図ることにつながるものだと思う。合奏にしても歌唱にしても、上手にこしたことはないが下手だからだめというものでもない。

豊かさを育てる音楽の学習は、何とんでもなく楽しくなければならぬ。技能の上達に心を配るあまり、音楽嫌いを作ることはいないというのが、中学部の基本的立場である。

合同音楽では、クラス音楽の練習成果を、他のクラスの発表を見学したり、励ましたりして認め合い、より大きな集団の中で、目標に向かって楽しみながら取り組む学習である。

クリスマス会は、各クラスが役割分担して準備をし、楽しんで取り組んでいる学部の行事である。クリスマス曲は、子どもたちに親しみのあるものが多く、それを背景に、クリスマス会でみんなどうたう新しい曲に取り組んでみようと考えたのである。

2. 実践例——あわてんぼうのサンタクロース——

(1) 題材設定理由

- ・ 二拍子の軽快なリズムで、子どもがのりやすい。
- ・ 歌詞がコミカルでストーリー性を持ち、愉快な印象を与える曲。

(2) 学習過程と子どもの反応

既習のクリスマス曲
をうたう。

- ・ きよしこの夜
- ・ 赤鼻のトナカイ

↓
気を盛り上げることでできた。

あわてんぼうのサン
タクロースの話を聞く。

↑
講義をばら蒔き、イメージを広げていくようにした。一番

既習曲をうたう前に、各クラスのクリスマス会に向けて、「どんな準備をしているか。」を発表し合いつた。

◎ クラス毎の取り組みの発表で、雰囲気

歌詞にストーリー性があることから、物語りを構成し、絵人形を使って視覚に

イメージを広げていくようにした。一番

の歌詞が終わると曲を流した。

- ◎ 新しい絵が提示されるたびに、「あっ、〜だ。」と声
がでて積極的な取り組みが見えた。
- ◎ 曲が流れると、「このお話し之歌だ。」と、すぐ反応
が返ってきた。
- ◎ 二番に入ると、手拍子が変わった。
- ◎ 絵人形に生徒の名前を付け、話題を身近なものにした
ことが効果的だった。

あわてんぼうのサン
タコースを歌う。
・ 示範を模倣して歌う。
・ 2〜5番を模倣して
うたう。
・ 1〜5番まで通して
うたう。

話を聞き、雰囲気は盛り上りを見せて、
いい状態だと思ったのに、

- ◎ 歌おうという段階で、今までの盛り
あがり半減し、気が抜けたように見た。
話しは話しとして聞き、歌は歌という
ように構えてしまったことが失敗だった
ようである。

〔反省点〕一番の歌詞について、物語→曲の鑑賞→歌唱
までもっていき、二番へと順次くり返す方がよかった。

また、それぞれの場面を文字表現で残すほどの工夫がた
りなかった。

次時予告く打楽器を
加えて歌う)を聞く。

最後に、次の時間にどうするか話して
終わった。

〔反省点〕生徒に自己評価をするとき与え、楽しかったこ
と、おもしろかったことを話し合っ、クリスマス会に向
けての意欲の持続をはかるべきであった。

3. 反省と考察

- (1) 視覚的にイメージを拡大することは効果的なので、今後も
大いに取り入れたい。
- (2) 技能の上達より楽しむ音楽の基本姿勢は大切だが、ひとり
ひとりの進歩を見つめる細かい配慮が必須である。
- (3) 養育的活動をとり入れた指導を研究する必要がある。

(中村 智美)

用途を意識し、協力して取り組む木工指導

— Aグループの場合を中心に —

1. 木工〈作業学習〉の基本的立場

中学部の作業学習は、11名をA・Bの2グループに分け、通計画の中に、農耕・木工・印刷・陶芸・調理・被服の6分野をそれぞれ経験するように位置づけている。

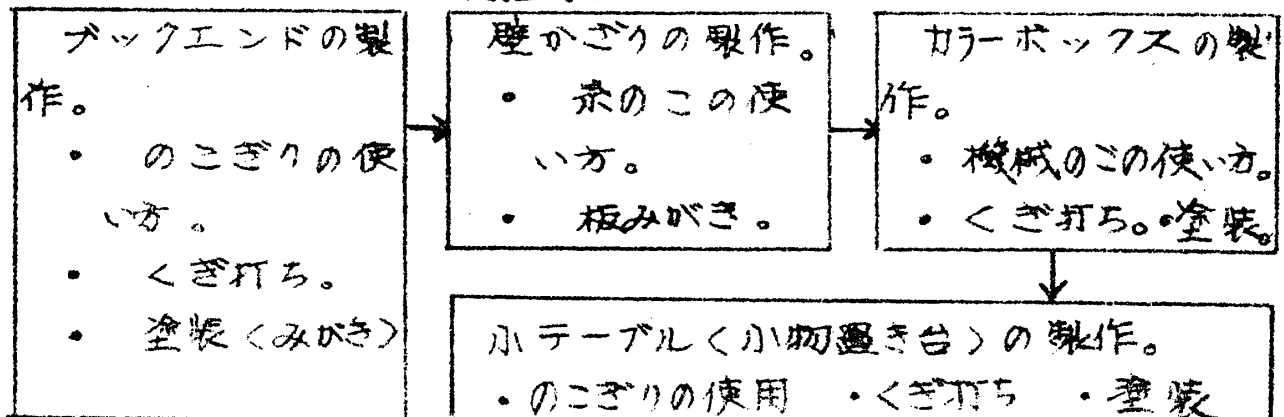
Aグループ(男子4名・女子2名)の取り組みを、Bグループと比較すると、少しは技能的な取り組みを見ることができが、その内容は極めて幼稚である。態度面も、励まし・援助に常時工夫が必要で、自主的・積極的な取り組みにはほど遠い。

そこで、木工指導では、「製作するものを、子どもたちの身近な生活の中から選び、製作過程に製品を意識づけ、製品を使用することで、やる気・意欲を育て、たくましく行動する子(こつこつと取り組む子)をめざした取り組み。」を基本とした。

指導に当たっては、次のことを配慮した。

- (ア) 教師製作の紙模型・実物見本の提示により作品のイメージづくりの手段とする。
- (イ) 製作段階では、2人組の共同製作とし、助け合い競い合うようにさせた。
- (ウ) のこぎりの使用・くぎ打ち・塗装を学習の中心とし、その他のことは、教師サイドでやることにした。

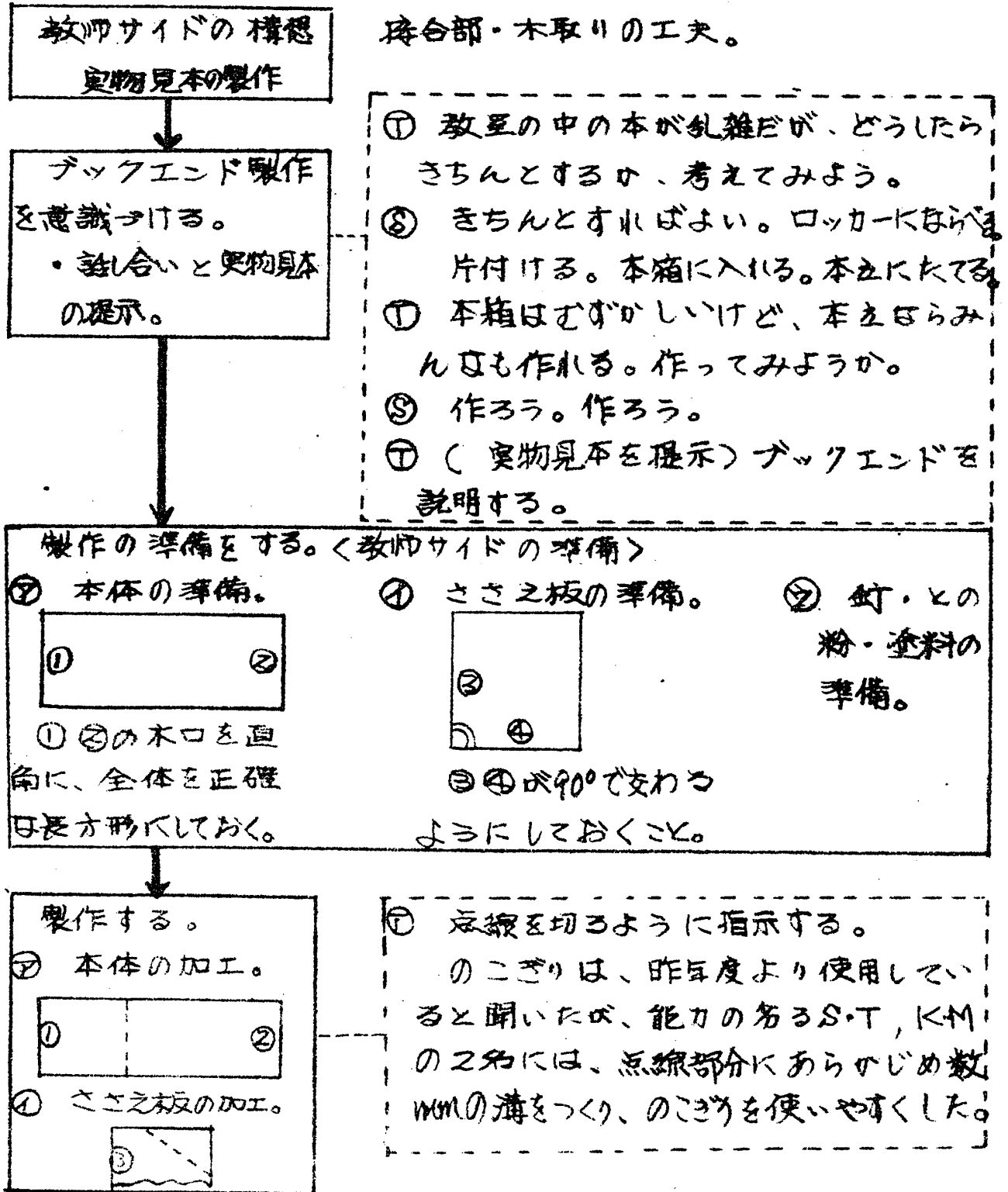
2. 取り入れた題材と技能的なねらい

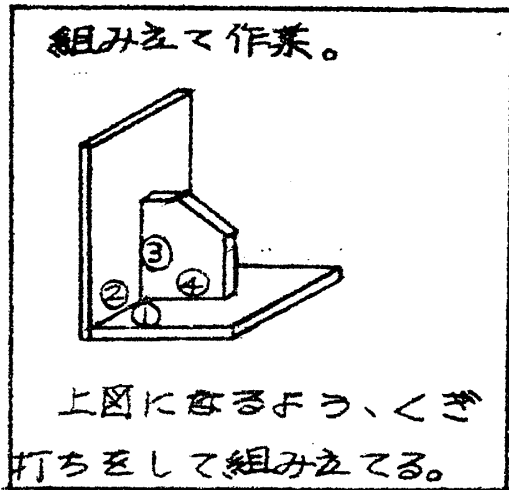


3. 実践例 —ブックエンドの製作—

本題材は、教室内の本が乱雑になり、口やのましく言っても、なかなか整とんができない生活実態に着目し、思いついた題材である。

指導経過と生徒の反応を述べてみる。





接合部分はすべて教師サイドで準備したことになるが、

⑦ 板を切って、くぎを打ち、自分で組み立てたという満足感がみえた。

⑧ 片方の完成のあと、次の片方への取り組みに最初と違った意欲的態度がみられた。

- 塗装をする。
- 素地みがき。
 - 目止め。
 - 水性ペイントで塗装。

⑨ 組み立てまでの意欲的互取り組みが、塗装段階であまり見られなかった。

- 美しくする、あるいは美しいものへの関心がないのか。
- 美への関心をどう育てるか。

4. 指導をふり返って

最初に取り組んだブックエンドの製作を終って、大きな問題点に気付いた。その中でも、

⑦ 乙人の笑面での取り組みが、校舎・競合に役立ち意欲的互態度が見られたのに対して、完成した作品は公共物・個人所有のいずれの関心もなく、作品を大切にすると持が育たなかった。

⑧ 絵本の種類(重いものが多い)・置き場所(スチール戸棚の上)とブックエンドのつり合いがわるく、使いにくいものを製作してしまった。

以上の点から、「生活に生かす」というねらいが達成できず今後の教師の取り組みを反省させられた。

5. 現段階での技能の実態と生徒の変容 (O・K・Tの△はO・K・Tの△)

項目	生徒名	A・T	A・K	Y・T	H・T	K・M	S・T
のこぎりぎ		△	△	○	○	厚板を切る	△
塗装		○	△	△	△	○	目止め最高
態度	積極的参加		△	教師の手伝い	厚板に釘を打	○	○

< 実戸 悟 >

「生きて働く力」を育てる生活单元学習の指導

1. 生活单元学習に対する中学部の立場

生活单元学習は、教科・領域を合科統合し、生徒の具体生活の中で再構成し、生活経験の深化・拡大をめざすものである。

小学部では個の確立に、高等部で職業が生活单元の中核となる。中学部はその中間にあって、小学部から高等部への橋渡しの存在と言える。

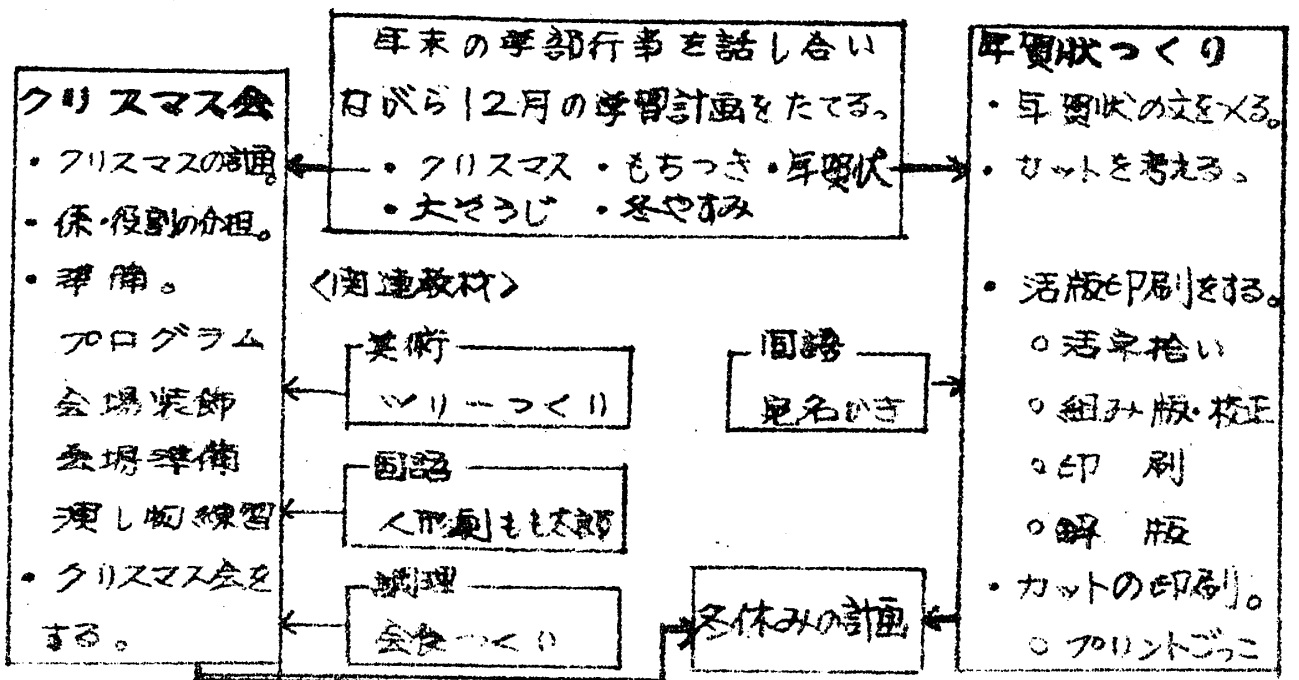
従って、中学部では、「友だちの中で楽しく生活する」という集団化・社会化と言ってもいい。とめざす中で、作業的内容を次第に多くして、「生きて働く力」の定着をはかろうとしている。

特に、高等部を目前にした中では、

- (1) しごととの取り組みを多くし、考え・体を動かす学習になるよう活動を考える。
- (2) 段々として、最後までこつこつと取り組める内容であること。の2点を单元構成の基本的立場とした。

2. 実践例——生活单元「年末のくらし」から——

(1) 指導計画 ※関係部分を中心に抜す。



12月の生活の中で、子どもたちが最も興味・関心をもって取り組むことが予想され、しかも家庭生活と結びついているのは、クリスマスと年賀状である。もちつきも子どもたちが意欲的に取り組んだが、生活と結びつく行事というより、今では日本の伝統行事といった印象が強く、「まつり」と同じように単元として構成するのは難しい。

ここでは、年賀状の印刷との取り組みについて述べてみたい。

(2) 年賀状づくり

年賀状に似た学習では、

㊦ 案内状をかく。(運動会・学習発表会・卒業生を送る会など)

㊧ 礼状をかく。(臨海学校・大山林間・修学旅行・職場見学など)

など、年間を通して比較的学習する機会が多い。

しかし、文の構成に苦勞し、手書きで消書するのは、抵抗が大きい。昨年手書きの年賀状を家庭まで持ち込んで取り組んだK・Mの母親は、20枚程に悪戦苦闘したことを語られ、「今年は印刷で。」と注文された。この事もあって、印刷による年賀状づくりを計画した。

3人の生徒の印刷との取り組みと反応

K・Mの場合 文の構成に時間がなかったが、カットは家で考えてきたと得意だった。

「自分の年賀状は、印刷室で自分で印刷する。」ことを告げたとき、一番目を輝かした。活字拾いから教師の援助を受けながら時間をかけて、ほとんど自分の手で20枚刷りあげた。

翌日、家庭から20枚の追加があった。Mは教師の援助の中で自信満々の取り組みをみせた。

あて名書きは、家庭学習になったが、夜遅くまでこつこつと取り組み、昨年とは大違いだと母親を驚かせた。

新学期がはじまると、もらった茨山の年賀状をみんなに見せて得意だった。

H・Tの場合 Tは 昨年活版印刷と取り組んだ経験がある。

ひとりで どんどん作業内容をこなした。カット印刷のプリントごっこは、今年はじめに取り入れたが、臭味を持って取り組み、ちよっと教えただけでひとりで印刷してしまった。

印刷が終わると「あて名を家で書いてくる。」というので、年賀状の送り先をノートに書いてくるように言った。宿題を出してもほとんどやってこないが、この時はノートにきちんと書いてきた。

新学期に入り、学級あてにきていた年賀状を紹介すると、早速「お礼状をかこう。」とお願いした。

これが、新学期最初の中3教室での学習に存った。

S・Tの場合 T子は、活字拾いの経験はあるが、印刷機の使用ははじめてである。いつでもそうだが、T子ははじめての取り組みには、大変は不安の情を示す。時に、恐怖の情すら示し、なかなか学習に取り組みとうしない。

今度もそうだと思ったが、印刷機の所定の位置に進んで行き、年賀状をセットしようとする気持ちを現わした。

T子の年賀状も自分の手で、リッパに刷りあげることができた。

3. 年賀状づくりをふり返って〈考察〉

年賀状という身近で、関心の深い題材を選んだこと。自分のものをつくるということ、どの子にも意欲的に取り組む姿勢が見られた。同じ時期に実施した宿泊作業学習・職場実習でも、最後までこつこつとがんばる取り組みが見られた。

3人の子どもたちは、それなりに自主的で意欲的でねばり強い活動が見られるのだが、そのことが刺戟にあって、日常生活の中に「生きて働く力」となり、たくましい行動として発揮されるかと言ふと、そうばかりでもないようである。

教師の指示がなければ動けないく何をしてもいいかわからないという傾向は、まだ残っている。

ただ私は、性急な反応を期待せず、年賀状の印刷に見せた子どもたちの取り組みの姿を大切にし、くり返しの指導の中で、たくましく生きる子の成長を期待したいのである。 (田中 将哉)

「話す」ことに重点をおいた国語科の指導

—ドリル学習の実践を通して—

1. 「話す」ことに重点をおく中学部の基本的立場

豊かな心をもち、たくましく行動するには、社会に目を開き、社会的に行動できることをめざす必要がある。その過程は、表現する力を身につける過程であり、意志の伝達が「生きて働く力」を發揮してくることである。

そのために、「ことば」は重要な役割をもっている。ことばをたくさん知り、生活の中で正しく使うことは、より充実した豊かな心情を育て、対人関係をうまくやっていく上で大切である。

特に、「話す」ということは、その基本であり、中学部では、国語科の四領域の中でも、「話す」ということをおろそかにしない実践を心がけ、取り組んでいる。

指導に当たっては、話題を具体生活より選ぶよう心がけ、話に目的意識をもたせるようにした。例えば、大山林間学校のあとでは、印象の強いうちに、スライドに構成し、それを使って固い感じを知らせ、文型にそって自由に話す場面を設定し話し合うのである。

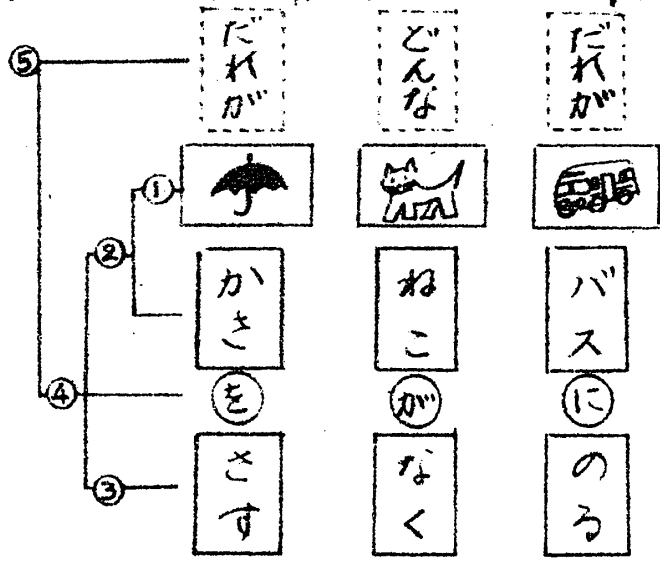
ここでは、毎時間のはじめにドリルするカードによる「ことば」の学習を取り上げ、実践の一端を述べてみる。

2. 実践例—絵・文字カードを使って—

毎時間のはじめには、図で示すような絵カード・文字カード・助詞カードを使って、正しく助詞を使い分けたり、正しく助詞を使って二語文・三語文を作ったりするドリル学習を行なっている。この場合、ことばのみを重視したドリル学習の繰り返しでは、子どもの意欲・やる気をなくしてしまうので、なるべく子どもたちの生活に密着したことばから選んで興味を持続をはかるようにした。

ドリル学習に慣れていない子どもには、はじめとまどった様子であつたが、自分たちのよく知っている物の描いてある絵カードを見て得意になつて物の名前を言い、名詞の文字カードをは

ていた。しかし、動詞の文字カードになると、まず、ことばを語としてとらえることのできない子が、単語によってはどこにはあっていいのが困る場面が出てきた。こういう時は、こちらが読んでやると、正しい位置にもっていくことができた。助詞カードにいたっては、最初のころは、正しく入れることのできる子が、名でその子も、他の子どものまらがいにはすぐに気付かず、平気でいることがしばしばであった。従って、正しい助詞を入れて文を声に出してその都度言わせることにより覚えさせるようにした。



- ① 絵カードをはる。
- ② 絵カードの下に、名詞の文字カードをはる。
- ③ ②の文字カードの下に、それに対応する動詞の文字カードをはる。
- ④ 正しい助詞を入れて二語文を完成させる。
- ⑤ 主語や修飾語を入れて三語文を作る。

3. 子どもの反応・考察

- カード合せというゲーム的要素を取り入れたことにより、いわゆる文法学習という堅苦しい雰囲気ではなく、遊びのような軽い気持ちで子どもたちが入ることができた。
- 最初は、名詞の文字カードと動詞の文字カードの対応がまらえがらであったが、練習を重ねていくに従い、カードを見ただけで対応できるようになった。
- 助詞については、「が」の使い方は意外に早く覚えられたが、「を」「に」の使い方は、まだまらえることがある。
- 主語や修飾語を入れた三語文を作るのは、子どもたちに自由にことばを選ばせたこともあって喜んで作った。中には、複文を作る子どももいたがそういう時には、文が正しければ、

自由に作らせた。

- 現在、絵カードは見せずに、名詞カードのみ、動詞カードのみで、二語文を作っている。特に、動詞カードのみの提示での文作りは、今までカード合せて使ったことば以外のことばを使って作ることができるようになってきた。

〈例〉

のる	バスにのる。	はく	くつをはく。
	ブランコにのる。		長ぐつをはく。
さす	かさをさす。		くつ下をはく。
	はりをさす。		

- 現段階での生徒の実態は次の通りである。(◎よくできる、○できる、×できない)

項目	生徒名	Y・T	T・Y	Y・A
1. 絵カードと名詞カードの対応		◎	◎	◎
2. 名詞カードと動詞カードの対応		◎	○	◎
3. 助詞の使い方	はな ◎ さく。	◎	○	◎
	ねこ ◎ なく。	◎	○	◎
	かさ ◎ さす。	× ^{助詞}	× ^{助詞}	◎
	くつ ◎ はく。	◎	○	◎
	りんご ◎ たべる。	◎	○	◎
	ぼうし ◎ かぶる。	○	× ^{助詞}	◎
	えんぴつ ◎ けする。	○	× ^{助詞}	◎
	バス ◎ のる。	◎	○	◎
	ブランコ ◎ のる。	○	○	◎
山 ◎ のぼる。	○	×	◎	

- ドリル学習で使っていることばでの文作りは回を重ねるごとに正しくなってきた。しかし、普段話していることばや、日記に書く文では、まだまだ助詞や動詞の使い方がまらがって、意味の通らない文になっていることが多い。

〈例〉・今日は 学校に 雪かきをしました。
 ・ボールが ぼくに はなが あたりました。
 ・バスには、たくさん 人が ありました。

今後は、ドリル学習の語彙をふやし、主語+目的語+動詞の三語文の定着をはかるとともに、助詞の使い方も合わせて指導していきたい。
 (徳田 純子)

「生きて働く力」を育てる体づくり

はじめに

「からだというものは、自然に発達するもの。」という自然成長論がある。もともと子どもと一人前に育てたのは、子ども自身のなかにある「自然形成力」である。近年、この「自然形成力」が弱化したため、からだの成長発達にゆがみを生じてきたといわれている。

従って、自然成長論では、子どもが一人前に育っていくことがむづかしくなったから、他からの働きかけによって、からだは作り上げられていくようにはったというのである。〈註3〉

精進児の体づくりを考えるとき、自然形成力も弱く、他からからだへの働きかけも充分でない状態におかれがちだと言える。

豊かな心もたくましい行動も健康なからだが望ましい条件であり、からだをより健全なものにつくりあげることが、重要であろう。

1. 体づくりの基本的立場

体づくり・運動能力の育成を、体育の時間だけでつけようと思っても、無理な相談というものである。

中学部では、次のような立場によって、体づくり・運動能力の育成に努めている。

- (1) 体づくりは、学校生活の全般を通じて行なわれるよう工夫されなければならない。
- (2) 特に、体育時間のほか、長休憩・放課後の取り組みに計画をもつことが大切である。
- (3) 体育時間での学習は、薄時活動のきっかけを作ったり、体を動かす方法を学習したり、体づくりへの興味・関心・意欲づくりと考えていく。

2. 年間行事に焦点をあてた体づくりの年間計画

体づくりに取り組むには、まず意欲の発生と持続が大切である。そのためには、年間行事は、取り組みを意識しや

すく、練習の成果を発表する場でもあり、効果があると思う。

中学部では、学校行事に体力づくりを位置づけ、成果を発表する機会の少ないものは、ミニ大会・ミニ発表会を設定し、成果発表の機会をつくるようにした。

月	年間行事	年間指導計画
4	全校遠足 ←	集団行動 (集合・整列・歩行・駆け足)
		陸上運動 (いろいろな走り方)
5	春の運動会 ←	運動会の練習・陸上運動
	運動機能測定 ←	
	ミニ大会 ←	ソフト・ボール
6	体力測定	器械運動 (マット・とび箱・平均台・ジ
	ミニ発表会 ←	ヤンプ台・ろく木等を使ったサーキット運動が中心)
	プール開き	
	学部遠足	水泳開始
7	プール祭り ←	器械運動
	ミニ発表会 ←	水泳 (水泳学習とその評価のための到達
	臨海学校 ←	標準小ステップによる)
9	プール納め ←	水泳
	秋季大運動会 ←	運動会の練習 (陸上運動・ダンス・体操)
10	連合運動会 ←	運動会の練習 (ボール運動・ダンス・陸上運動など)
	久松山登山	
	大山林間学校	卓球
11	連合卓球大会 ←	卓球
	学習発表会 ←	体育衰技・リズム体操の練習
12		バドミントン
1	球技大会	バドミントン
	↑	バスケットボール
2	スキー遠足 ←	雪あそび・スキー・そり
		バスケットボール
3	ミニ大会 ←	サッカー

3. 指導法に関する2・3の考察

体力づくりとの取り組みは、意欲(やる気)との関係が深いと述べたが、興味・関心を意欲につなぐため、2つのことを大切にしている。

(1) 楽しさ・よろこびを大切にする指導

常にひとりひとりに対し、賞賛・励ましを忘れない指導である。言い換えると、できる限り声をかけてやり、少しでも上達したり、良い点があればさばし出してでもしっかりわかるように認めてやることである。子どもたちは、自分に声をかけられた事で意欲をもら、認められることで自信をつけ、どんどんと練習にとりくめに。

(2) わかりやすさ、とりくみやすさを大切にする指導

目標や課題ができる限り具体的でわかりやすいことは子どもたちの取り組みを容易にする。学習内容を設定するに当たって、既定のルールにとらわれることなく、やさしい技術・運動方法を工夫し、ルールを簡単にするなど配慮が大切である。

指導方法には、スモールステップの原則を取り入れ個人差に応じた指導を心がけねばならない。

評価も、子ども自身でわかる方法を取り入れることが大切である。

以上、体力づくりについて述べた。子どもたちは少レオツ変化のきざしが見えかけてはいるが、まだまだ長い時間が必要だと思ふ。

子ども変化に関する具体的な資料は、5月までには整理して提示し、指導ご批判を受けたいと思ふ。 (盛山 勝美)

以上、中学部の研究経過・実践を通して、「豊かな心をもち、たくましく行動する子」をめざす中学部の立場を述べた。5月の研究発表大会に向けて、理論・実践に裡々御教示をいただき。